

婦人と繪畫

黒田清輝

私は教育の目的を以て繪畫を學んだのでないから、自分の學んだ順序、自分の見聞した丈にたどつて、美術教育に従事して居る、

そこで此繪畫が、どの位婦人に必要であるかと云ふことが先決問題である、男子に必要であることは、今更喋々するまでもないことであるが、併しそれが婦人にまで必要であらうか、その程度もどの邊まで、あらうか、と云ふやうな事は、あまり一般に考へて居なかつたかの如く考へる、

併しよく考へて見れば、一般の人悉くが繪畫を學ぶ必要は、美術の眞正の趣味を解して、快樂を同じやうにして居るか、と云へば、それは望んでもむつかしいことであるが、幾分かまでは其趣味を解する度を進めることが出来るのである、

而して其趣味を解す、即ち美術思想を進めた結果、實用上果して如何なる利益があるか繪畫は工藝上の發達に就ては、最も缺くべからざる科目で、繪畫が進めば窯業の如きも、染色業の如きも、其他一般の工藝が大に發達するやうになる、されど或は窯業によつて繪畫を發達させやう、或は染色業によつて繪畫を進歩させやうといふことは、それは順序の間違つた話で、まづ繪畫を進歩させ、國民の美術思想を拵へ置けば、それですべて繪畫を應用すべき工藝は、自然に發達して來るのである、

次に起る問題は、工藝は男子の仕事である、即ち男子には美術教育の必要はあるが、随つて女子には其必要はあるまい、と考へて居る人がある工藝は男子の専有たるや否やは別問題としても、実用上工藝の發達に繪畫が必要とすれば、打捨つてある女子こそ、男子より多く美術思想を注入して置かねばならぬ、女子に美術思想を注入して置かねば、此思想を一般に行渡らすことが出来ぬ、

何故かと云へば、如何なる人でも、この社會に仕事をして居る人は、大なり小なりの家庭をつくつて居る筈で、子供は母に育てられる、子供の接近するのは母親であつて、家を形づくるのは主人であることには相違ないが家といふものゝ集合體が社會である、

その社會の根元たる、家庭の主宰者たる女子は、美術思想を注込んで置けば、小兒が乳を飲みながらも美術的觀念を他日に得らるゝやう、自然に教育されることであらうと信ぜられる、

現今我國の文物は非常に發展して、今後ますます進歩して行くに違ひない、そこで私は繪かきの専門家として考へるに、工業の發達に、美術がその基礎とならねばならぬ筈であるに、却つて工業のお伴をして行く有様で、今日の有様から見れば、工藝の前途も危まれる有様である、

併し私はそれを心配して居るのではない、現在は甚だ幼稚な所に居るが、將來は發達するに違ひない、私等も出來る限りは、進歩せしむる考である、素より私ばかりでなく、多くの同感者もあらうと思ふから、兎ても急に進める譯には行かぬ迄も、漸次に道を開いて行くであらうと思ふ、

前述の如く、女子に就ては、どの位迄は美術教育が注意を拂はれて居るかと云ふことは私人としては折々見受

けるやうであるが、政府として充分に女子美術教育といふことに力を入れて居ることを知らぬ、今日の時期としては、政府でも、個人でも、今日以上の力を、女子美術教育に注がねばならぬ、而して男子の我々と相俟つて女子の美術思想を進めたならば、大に我日本の工藝界に裨益することが多からうと信ずるのである、

〔『繪畫叢誌』三九 大正四年二月〕